

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：30105

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02842

研究課題名（和文）プレイワールド・デザインに基づく保幼小接続期カリキュラムの臨床教育学的開発

研究課題名（英文）Clinical-educational curriculum development of the transitional period between preschools and elementary schools based on the play-world design

研究代表者

庄井 良信（Shoi, Yoshinobu）

藤女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：00206260

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、保幼小接続期カリキュラムに関する協働省察を、国際的な規模で実施した。その共同研究の成果については、臨床教育学の視座から再考した。その成果に基づいてPWD（play-world design）に基づく保幼小接続期カリキュラムの基礎理論を構想した。コロナ禍による研究環境の制約はあったが、オンライン会議で補完した。本研究の成果は、PWDカリキュラムの基礎研究とそれを応用した実践研究として、全国規模の研究誌や、全国規模で開催された保育士養成の研修会で公開することができた。臨床教育学の理論研究については、全国学会のシンポジウムや学術論文として公刊し、その成果を社会に還元することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保幼小接続期カリキュラムの開発に理論的探究の焦点を絞ることを通して、文化・歴史的理論を基盤としたヴィゴツキーの人間発達援助理論を発展させることができた。具体的には、ヴィゴツキーが提唱した諸理論の核心にある心的情動体験（perezhivanie）概念に基づいてプレイワールド・デザイン（PWD）の教育・保育理論を構想することができた。幼児期と児童期を架橋する移行の教育・保育に関する研究は、近年、重要な研究テーマである。本研究は、この理論的・実践的なテーマを、臨床教育学（総合的人間学に基づく臨床的な発達援助学）の視座から再考し、新たな研究の端緒の発見に貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, collaborative reflection on the curriculum during the preschool and primary schools transition period was carried out on an international basis. The results of the collaborative research were reconsidered from the perspective of clinical pedagogy. Based on the achievements, a fundamental theory of the preschool and primary schools transitional period curriculum based on play-world design (PWD) was developed. Although there were limitations in the research environment due to the Corona Disaster, these were complemented by online meetings. The results of this research, as basic research on the PWD curriculum and practical research, could be published in national research journals and at workshops for the training of childcare professionals held on a national scale. Theoretical research on clinical pedagogy was published as symposia and academic papers at national conferences, and the results were able to be shared with society.

研究分野：臨床教育学

キーワード：保幼小接続 プレイワールド・デザイン ヴィゴツキー 心的情動体験 文化・歴史的理論 教育と保育 カリキュラム開発 協働省察

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

幼児期及び児童期の指導要領等の改訂に伴い「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続」を保証する保幼小接続期カリキュラムの開発が喫緊の課題となっていた。特に「遊びから学びへの移行期」のカリキュラム開発は、その背景となる基礎理論と共に、教育実践としての臨床的な典型像の解明が急務であった。申請者は、フィンランドやリトアニアの大学・研究機関と連携し、プレイワールド・デザイン (**play-world design**; 以下、**PWD** と略す。) の学習指導の臨床教育学的研究という理念を共有しつつ、保幼小接続期カリキュラムの開発を試行してきた。

保幼小接続期におけるケアと教育は、教育学研究の対象として、探究すべき問いが凝集して立ち上がる研究領域の1つであった。[秋田喜代美 (2016)「いま『保育』を考えるために」秋田喜代美・山邊昭則・多賀殿太郎編『あらゆる学問は保育につながる - 保育発達実践政策学の挑戦』東京大学出版会、参照。]

当初、保幼小接続期のカリキュラム開発において探究されるべき問いは、以下の3点だと考えられた。1つ目は、文化論的な接続論が前景に押し出され、発達論的な接続論が後景に退く傾向が強いのではないか、という問いである。2つ目は、遊びから学びへの発達の連続性(「なめらかな接続」)が意識される一方で、遊びから学びへの移行における循環的往還性と非連続性、文化社会的な被制約性、主観的経験の本源的固有性などが十分に吟味されていないのではないか、という問いである。3つ目は、遊びから学びへの移行期に固有な他者とかかわり合いの特性(多様な発達特性を媒介し合い、新たな問いを探究し合う子どもの、主体性と協働性の混淆的な萌芽状態)に関する教育臨床研究が、十分に深められていないのではないか、という問いである。

これらの問いは、学術的には、ヴィゴツキーの文化歴史的理論とプレイワールド理論という基礎研究から生まれるものであった。また、保幼小接続カリキュラム開発を、臨床的な人間発達援助論(臨床教育学)の視座から根源的に問い直すことで生まれる問いでもあった。[庄井良信 (2014)『いのちのケアと育み—臨床教育学のまなざし』かもがわ出版。庄井良信 (2019)「子どもの育ちに寄り添う保幼小接続の課題—臨床教育学の問いとして」日本臨床教育学会第9回研究大会発表要旨集録。]

国際的には、フィンランドにおける保幼小接続期の先導的実践に関する情報蒐集も行ってきた(拙編著『フィンランドに学ぶ学力と教育』明石書店、2004年)。このような研究活動を背景に、筆者は、フィンランドのオウル大学のマルコ・キエリネン(M. **Kielinen**)博士と研究交流を重ね、小学校低学年における主体的・対話的で深い学びを志向する学習環境の構成とその舞台芸術の演出論(**scenography**)も探究していた。また、遊びから学びへの往還的移行期における**PWD**の研究は、文化と活動研究国際学会(**ISCAR**)の研究誌、文化歴史的理論の研究誌、対話教育学の国際学会研究誌等において、**Rossen (2013)**; **Hakkarainen & Bredikyte (2015)**; **Veresov (2017)**らが、ヴィゴツキーの心的情動体験の理論や発達の最近接領域(**ZPD**)の理論として基礎研究が積み上げられてきていた。

日本においても、同様の関心事で、早稲田大学の宮崎清孝氏らが先導的実践と、その理論的検討を深めていた。本研究は、これらの理論的な到達点と課題を検討し、それを保幼小接続期のカリキュラム開発の実践事例として典型化を試みるものであった。また、上智大学の酒井朗氏は『教育学研究』(第81巻4号、2014年)において、保幼小の教育方法をつなぐために「子どもが経験する学習の総体を見据えたカリキュラム編成」の重要性に言及していた。酒井(2014)の研究は、保幼小接続期カリキュラム再考の指針として示唆に富むものであった。本研究の課題は、これを日本における臨床教育学の視座から精査し、国際的・全国的な共同研究として、多様性に開かれた典型実践として解明していくことであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、フィンランドやリトアニアの研究機関との共同研究の成果に基づいて、臨床教育学の視座から、保幼小接続期カリキュラムの基礎理論と、その具体的な教育実践の典型事例を明らかにすることである。そのことを通して、主に初等教育における保幼小接続期カリキュラム(「スタートカリキュラム」を含む)の構成における理論的・実践的課題と、新たなカリキュラム開発の可能性について探究したいと考えた。

本研究では、基礎研究であるヴィゴツキーの文化歴史的理論(**cultural-historical theory**) (特に心的情動体験:**perezhivanie**の理論)と、その応用研究の1つであるプレイワールド・デザイン(**PWD**)に基づく臨床的な人間発達援助理論を、保幼小接続カリキュラムの開発を再考するための基礎理論として活用した。その理由は以下の3点であった。

(1) 保幼小接続期におけるカリキュラムを開発する際に、人間発達援助理論として、文化・歴史的理論を活用し、ヴィゴツキーの人間発達援助理論研究そのものを深化・発展させることが期待できると考えたからである(基礎研究への貢献)。

(2) ヴィゴツキーの理論の核心にある情動体験の理論を応用した、プレイワールド・デザイン

を臨床的に応用する研究によって、遊びから学びへの移行理論を根源的に問い直すことができると考えたからである（応用研究への貢献）。

（3）幼児期から児童期の人間発達援助理論の探究は、近年、日本臨床教育学会においても重要な研究テーマになっている。本研究は教育学固有の位相から発展してきた臨床教育学（総合的人間学に基づく臨床的な発達援助学）の新たな展開にも貢献することが期待できると考えたからである（近接する草創期学問分野への貢献）。

3. 研究の方法

北欧フィンランドとリトアニアの大学・研究機関との共同研究の成果に基づいて、臨床教育学の視座から、保幼小接続期カリキュラムの基礎理論を解明し、その具体的な教育実践の典型事例を明らかにすることのために、以下の1)～7)のプロセスで研究を遂行した。

（1）ヴィゴツキーの人間発達援助理論とその影響のもとに発展している文化歴史的理論において、情動体験（*perezhivanie*）の理論、3歳及び7歳における発達の危機の理論、遊びと学びの接続期における「発達と教育」の理論等を中心に、プレイワールド・デザイン（**PWD**）の教育・保育実践に関する内外の文献を蒐集し、その文献データに基づくレビューを行うことを通して、保幼小接続期カリキュラムに関する発達論的な基礎理論を構築する。

（2）保幼小接続期カリキュラムの開発に関する理論的な先行研究と先導的な教育・保育実践に関する内外の文献を蒐集し、その文献レビューを行う。また、その理論構築のためにフィンランドやリトアニア等の大学・研究機関の研究者との国際的な情報交流を行う。そのことを通して、保幼小接続期カリキュラム開発に関する教育学的な基礎理論を構築する。

（3）過去20年にわたって、申請者がフィンランド及びリトアニアの研究者との共同研究のなかで蓄積してきたプレイワールド・デザイン（**PWD**）に基づく内外の参与観察記録（映像データ、音声データ、エピソード記述等）を、日本語及び英語のトランスクリプションに変換し、事例の典型化を行う際の基礎データとして整理する。

（4）日本（主に北海道と広島県）において、現在、萌芽的形態で行われている**PWD**に基づく教育実践及び保育実践を抽出し、当該の小学校・幼稚園及び保育園に調査協力を得て、申請者が実践の構想・参与観察・省察のサイクルに参画するデザイン実験を行う。

（5）以上のプロセスと並行しながら、**PWD**に基づく保幼小接続期カリキュラム開発に関する教育・保育実践の典型事例を整理し、それらを裏付ける基礎理論とその今日的課題と可能性について、臨床教育学の視座から検討する。

（6）本研究期間の3年間、日本で、研究機関等の協力も得ながら、**PWD**に基づく保幼小接続期カリキュラム開発のデザイン実験を実施し、フィンランドのオウル大学やリトアニアの教育大学等でも同様のデザイン実践を実施し、国際的な規模で、協働省察を行う。なお、このデザイン実験については、両国の研究者に同意を得ている。

（7）上記と並行して、海外とのオンライン会議等による研究協議や、現地調査での資料蒐集と参与観察を行い、**PWD**に基づく保幼小接続期カリキュラム開発の典型指針（ガイドライン）を、臨床教育学の観点から構想する。その結果は、広く社会に発信し、その成果を、日本の初等教育実践と国際的な規模での学術研究の発展に貢献したい。なお、社会情勢等により、研究が当初計画どおりに進まない時は、先方の大学機関と計画の再調整を行う。

4. 研究成果

研究成果としては、以下の（1）～（6）が明らかになった。

（1）保幼小接続期教育の専門性

保幼小の連携・接続は、重要な政策課題である。一般にこの政策課題の背景には、「小1プロブレム」の問題や、経済協力開発機構（**OECD**）などから、その重要性が指摘されている「幼児期の子どものケアと教育」（**early childhood education and care**: 以下、**ECEC**と略記する）または「幼児期の子どもの教育とケア」（**early childhood education and care**: 以下、**ECCE**と略記する）への関心があった。「人生の始まりこそ力強く」（**starting strong**）という関心事は、今日も、国際的な関心事となっている。

このような社会的な文脈を背景に、日本では、保幼小の連携・接続が、保育・教育政策の1つの「要」となった。この政策で問われるべき重要な課題は、子どもの育ちと学びの円滑な連続性を保証するために、尊厳ある子どもの生活（**life / das Leben**）にとってどのような教育の接続が可能かという問いである。そして、その接続のために教育の担い手（教育者：**educator**）たちが、どのように連携できるのかという問いである。

（2）通時的連携と共時的連携の視座

日本において、保幼小の連携・接続という政策課題は、幼児期の教育と児童期の教育との「滑らかな接続」を、教育の担い手である教育者（教育行政の担当者を含む）がどのように実現するか、という問いとして探究されてきた。幼児期の教育の担い手と、児童期の教育の担い手が、共に子ども理解を深め合い、地域の中で、保幼小の連携を円滑に進めるためには、組織どうしの「タテの連携」（通時的連携）が必要である。この「タテの連携」を実現するためには、多様な立場

で子どもの教育に参画している者どうしの「ヨコの連携」(共時的連携)も必要である。教育施設(園・学校)と、地域の心理・福祉・医療等の支援機関との「ヨコの連携」は、幼児期においても、児童期においても、子どもの育ちと学びの、滑らかで切れ目のない接続にとって不可欠である。教育の文脈では、幼児教育の担い手(教諭等)と小学校教育の担い手(教諭等)が、それぞれの現場の具体的な実態を観察・交流して学び合う実践が始められた。双方の教師たちが幼児教育の現場と小学校教育の現場の「違い」に気づき、同じ地域において自らの実践を問い直していくことは、保幼小の接続と連携にとって有意義な一歩であった。

(3) ケアを包摂する教育(educator)の視座

異なる組織の実践の相互観察とその後の対話を通して、教育者(教諭等)の側から、連携と接続の課題が整理されていった。その焦点は、子どもの育ちと学びを豊かに保障するために、幼児期の教育環境と、児童期の教育環境との「段差」や「障壁」を減らし、前者から後者への円滑な移行を、滑らかに実現できるように編成された教育カリキュラムの開発と、その実施(授業等)に向けた環境の整備に向けられた。

もとより、このような教育環境の整備は、今なお重要な政策課題である。そして、このことを意識した「保幼小接続期」の教育カリキュラムの開発・研究の成果として意義深いものも、全国各地で数多く蓄積され始めている。しかしこれらのカリキュラム開発が進む一方で、次のような問いも生まれてきている。それは、そもそも「保幼小の接続・連携」は、誰のための接続・連携で、何のための接続・連携か、という原点に回帰した問いである。これは制度論・文化論的な連携・接続の論理の探究から、発達論的な連携・接続の論理の探究という問いの位相転換であった。

(4) アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの付置構成

そのような専門職に求められるのが、子どもの育ちの論理(ケアを包摂する発達論)に基づいて、幼児期と児童期の移行期カリキュラムを研究・開発する専門性である。ここでいうカリキュラムは、人生の学びの足跡(物語)としてのカリキュラムであると同時に、それを豊にするための教育カリキュラムである。一般的に言えば、幼児期(就学前)のカリキュラムは、経験カリキュラムに基づく生活から創出されることが多く、小学校以降(就学後)のカリキュラムは、教科カリキュラムに基づく授業で遂行されることが多い。この違いが、保幼小の「断絶」の1つの要因だと考えられる場合もある。

しかし、子どもの育ちの論理に寄り添って、幼児教育と小学校教育の滑らかで切れ目のない移行を支援することを考えると、幼児期に教科カリキュラムの萌芽形態となるような授業(新たな知識や技能を、他者と楽しく学び合う授業)があってもよいし、児童期に経験カリキュラムのさらなる進化形(生活から問いを立ち上げ、学び合う課題にし、それを主体的・対話的に深く探究的に学ぶ「生活科」のようなもの)があってもよい。そう考えると、子どもの育ちの論理(ケアを包摂する発達論)から考えられる保幼小接続期のカリキュラムは、小学校で遂行されてきた伝統的な学びの様式を薄めて模倣した学びを、幼児期の学びの様式に取り入れることではない。むしろ、遊びを土台として展開されている幼児期の学びの様式に眠り込んでいる優れた特性を、小学校(あるいはそれ以降)の学びの様式に積極的にどう活用していくか、と問うことこそが、今日の保幼小接続期のカリキュラム開発に積極的に貢献できると考えられる。

(5) 虚構を伴う演劇空間のセノグラフィ

遊びから学びへの移行期に特有な活動システムに関する基礎研究と臨床研究として、いま、フィンランドやリトアニアにおいてナラティブ・ラーニング(物語を紡ぎ合う学び)というプロジェクトが進められている。ナラティブ・ラーニングは、虚構場面を伴うプレイワールド(演劇空間)において、そこに参加する人びとが、それぞれの自己物語のプロットを、文化の探索と創造という物語のプロットに投影しつつ、共に新たな意味を創造し合う活動である。ナラティブ・ラーニングを演出する保育者・教育者に求められるのは、子どもがある文化としての物語と出会うなかで紡ぎだされる自己物語を傾聴し、その物語を聴き合い、語り合いながら、その人にとっても、他の人にとっても意味のある世界を協働で創り合うことであり、そのことを通して、文化創造の物語のプロットを協働で更新しつつながら新たな意味を創造し合う活動である。

この研究プロジェクトのテーマの1つは、子どもの保育・教育実践における、遊びと学びの関係性の根源的な問い直しである。それは「遊びは学びだ」あるいは「学びは遊びだ」というような両者の短絡的な同一視論ではないし、遊びを遊び込めば、それが自ずと学びにつながるというような両者の予定調和論ではない。そうではなくて、遊びと学びを、それぞれ相対的に独自の論理を持つ固有な活動として捉えたうえで、ケアと教育という文脈で、両者が相互に豊穣化し合う関係性を探究しているのである。

北欧のナラティブ・ラーニングの試みは、ヴィゴツキーの理論と、その後の文化歴史理論を背景に展開されている。ヴィゴツキーは、子どもの主体的動機は、遊びの中の情動体験を通して形成され、それが「発達の最近接領域」を創造すると考えた。ヴィゴツキーは、子どもの発達に伴う主導的な活動の(遊びから学びへ)の移行は、一方向ではなく往還的発展の過程だと考えた。つまり、子どもが学齢期になると遊びが消滅して学びになるのではなく、遊びは学びのなかにその様態を変えて生き続けると考えた。そして、学びという活動をその内部で活性化しつつ考えると、そうだとすれば、遊びの中に学びへの契機を見つけるだけでなく、学びを深い学びにす

るために、学びの中に遊びの契機を積極的に取り込む意義も見える。ナラティブ・ラーニングは、他性（alterity）としての他者と、我が身を分かち合って臨在し、身体と身体を響き合わせながら、ある情動体験を共有することから始まる。そこから、子どもが受動（パトス）として感受している情動を、他者と共に原始的なイメージ（口承文学としての昔話や伝説などに埋め込まれた始源的な物語プロットを含む）として共有する探索活動を創作する。そして、情動を伴うイメージと、物語の解体と創造というプロットとを摺り合わせながら、自他のナラティブを紡ぎ合い、新たな意味を創造し合う。この一連の活動がナラティブ・ラーニングである。

北欧の試みを通して考えると、学びを支援・指導する教師や保育者に必要なのは、他者との学び合いのなかに息づく遊び合い（joint-play）の契機を発見する叡智と、そこから物語を紡ぎ合う学びの環境を演出する叡智になる。デザイン実験として保育や教育の現場に参画しながら得られるこれらの叡智は、保幼小接続期におけるカリキュラム開発の重要な指標となる。

（ 6 ）文化歴史理論における心的情動体験と臨床教育学

ヴィゴツキーは「芸術心理学」（1925/1971）のなかで、クルイロフの寓話「狼と子羊」を例示し、読者がイメージ体験する悲劇のカタストロフィの中に、心的情動体験の1つの典型を見いだしていた。また、ヴィゴツキーは、遊びと創造的想像に関する論稿の中で、自己と環境との「間」に生じる心的情動体験が、遊び、演じる世界（play-world）の重要な契機であると考えていた。その文脈で、ヴィゴツキーは「遊びは『発達の最近接領域』を創造する」と言及した。

ナラティブ・ラーニングは、こうしたヴィゴツキーの遊びと創造的想像に関する文化歴史学派の理論を背景にしている。それは、虚構場面を伴うプレイワールド（演劇空間）において、自己物語（self-narrative）のプロットを、文化の探索と創造という物語のプロットに投影し、新たな意味を創造し合う学習活動の理論として展開した。そこには、人類初期の共同体の儀式（演劇）としてのストーリーテリングで、語られ（語り合われた）文化的ナラティブ、心的情動体験が、揺らぎのある多声楽的な対話の中で語られ、語り直された協働的ナラティブ、即興詩人が伝承してきた詩的ナラティブという3つの位相があった。

一般に、臨床教育学は、尊厳ある他者の人生に寄り添いつつ、人間形成・発達援助の現場で生成される臨床的な知を構想する領域横断的な学問分野である。今日、多様で複雑な様相を呈する教育の課題や、学校・地域の現場で生じる切実なニーズに応じる学びの環境を提供することが、高等教育機関としての大学や大学院に期待されている。そのカリキュラムには、一方で、人間の生活や学びに関する思想・理論を深く探究する教育課程が必要である。もう一方で、具体的な生活や学びの現場に参画し、そこから問うべき問いの糸口を発見する教育課程も必要である。臨床教育学は、子どもの生活と学びの現場に参画しながら、リサーチベースで両者の統合を志向する学問領域である。また、臨床教育学は学校・地域社会に生きる子どものウェルビーイングの向上を探究する学問でもある。

本研究を通して、臨床教育学が保幼小接続期のカリキュラム開発に極めて重要な役割を果たすことが明らかになった。今後の課題は、ナラティブ・ラーニングの概念を、学習環境構成論として拡張することである。これらの研究成果を広く社会や学校教育現場に還元したい。

<文献>

（ 1 ） Bredikyte, M. and Hakkarainen, P. (2017). Self-regulation and narrative interventions in children's play. In T. Bruce, P. Hakkarainen and M. Bredikyte (Eds.). *The Routledge international handbook of early childhood play*. New York: Routledge, 246–257.

（ 2 ） Hakkarainen, P. & Bredikyte, M. (2017). Pretended play and child development. In T. Bruce, P. Hakkarainen & M. Bredikyte (Eds.). *The Routledge international handbook of early childhood play*. New York: Routledge, 70–84.

（ 3 ） Veresov, N. (2017). The concept of perezhivanie in cultural-historical theory: Content and contexts. In Fler, M. Rey, F. G. and Veresov, N. (2017). *Perezhivanie, emotions and subjectivity Advancing Vygotsky's legacy*. New York Springer. 47-70.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 548 |
| 2. 論文標題 ウェルビーイングの探求 存在論的承認の教育哲学 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 教育振興（北海道教育振興会機関誌） | 6. 最初と最後の頁 2-3 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 546 |
| 2. 論文標題 自己調整能力の涵養 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 教育振興（北海道教育振興会機関誌） | 6. 最初と最後の頁 6-7 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 59 |
| 2. 論文標題 DX時代におけるICT教育の未来像－臨床参画法（CIM）による授業分析に関する考察 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 藤女子大学人間生活学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 21-34 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 534 |
| 2. 論文標題 コミュニケーション力を高めるために | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 教育振興（北海道教育振興会機関誌） | 6. 最初と最後の頁 6-7 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 536 |
| 2. 論文標題 レジリエンスの向上について | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 教育振興（北海道教育振興会機関誌） | 6. 最初と最後の頁 6-7 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 540 |
| 2. 論文標題 生徒理解を深める叡智と思慮深さー存在論的承認 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 教育振興（北海道教育振興会機関誌） | 6. 最初と最後の頁 4-5 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 542 |
| 2. 論文標題 創造力の源泉としての語り合い | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 教育振興（北海道教育振興会機関誌） | 6. 最初と最後の頁 4-5 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 783 |
| 2. 論文標題 物語を紡ぐ ナラティブ・カリキュラム | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 公益社団法人全国私立保育園連盟『保育通信』 | 6. 最初と最後の頁 24-27 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 782 |
| 2. 論文標題 ウェルビーイングの哲学と保幼小接続 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 公益社団法人全国私立保育園連盟『保育通信』 | 6. 最初と最後の頁 24-27 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 31 |
| 2. 論文標題 ナラティブ・ラーニングの詩学：聴き合い、語り合い、祈る思いで希望を紡ぐ | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 NPO法人お茶の水児童教育研究会『児童教育』 | 6. 最初と最後の頁 1-4 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 庄井良信 | 4. 巻 307 |
| 2. 論文標題 保幼小連携・接続の担い手(エディケーター)に求められる専門性：北欧の「ナラティブ・ラーニング」の試み | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 全国保育問題研究協議会『季刊保育問題研究』 | 6. 最初と最後の頁 35-49 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 庄井良信 |
| 2. 発表標題 ナラティブラーニングの射程とその展開可能性－芸術的イメージ体験と即興詩人のアート |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会 第34回大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 庄井良信 |
| 2. 発表標題 ヴィゴツキー理論のオントロジカルな展開と臨床教育学の未来 |
| 3. 学会等名 日本臨床教育学会 第12回大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 庄井良信 |
| 2. 発表標題 ナラティブ・ラーニングの詩学－関係論的存在論（relational ontology）と臨床教育学の問い |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会 第33回大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 庄井良信 |
| 2. 発表標題 臨床教育学研究の国際的環境－黎明期におけるアカデミックな探索の軌跡 |
| 3. 学会等名 日本臨床教育学会 第13回大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 庄井良信（大家まゆみ・本田伊克編） | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 198 |
| 3. 書名 これからの教職論－教職課程コアカリキュラム対応で基礎から学ぶ | |

| | |
|------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 庄井良信（編著） | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 学文社 | 5. 総ページ数 196 |
| 3. 書名 生徒指導－未来の教育を創る教職教養指針 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|